

『おくのほそ道』紀行・点と線

——永平寺から種ヶ浜まで——
(二)

横山邦治

一

八月三十一日、月曜日、快晴。芭蕉は今庄から敦賀までを「燧が城、帰山に初鴈を聞きて、十四日の夕暮れ、敦賀の津に宿を求む」と述べて、今庄の宿外れにある義仲の古戦場とされる燧ヶ城跡の史跡と歌枕の鹿蒜山に触れるだけで、木の芽峠の難所については言及していないが、芭蕉に先行した曾良の随行日記には「九日、快晴。日ノ出過ニ立。今庄ノ宿ハツレ、板橋ノツメヨリ右ヘ切テ、木ノメ峠ニ趣、谷間ニ入也。右ハ火ウチガ城、十丁程行テ左リ、カヘル山有。下ノ村、カヘルト云。未ノ刻、ツルガニ着。」と詳細である。今日はその木の芽峠を越える計画、猛暑の中をとにかく娘子軍団は出発である。由紀さんと吉中さんが先導役である。今庄の町は、再開発には熱心でも、町並み保存にはあま

り執心はしていないように思えるが、それでもところどころに江戸期の情趣をただよわしている家並みも残る旧街道を南下していくと、町外れに右と左とに道が分れているところに行き当る。

今庄駅には駅弁なくて、弁当の準備が出来ず、この町外れからは商店とてないことが判っていたので、小さな食料品店でパンとかジュースとかを買い込んで、昼食の準備とする。鶯の関での昼食よりも格落ちで、皆何となく心細そうな顔であたりを見廻すことである。木の芽峠は長い峠道であるはず、とにかく荷物は少い方がよろしいというので、格落ち弁当、要するにパンとカンジュース・ウーロン茶を少しずつビニール袋に入れてもらって歩き始める。湯尾峠越えて相当アゴを出していたところで、それに倍する峠道というのであるから、ここは決断、峠の入口までバスでも

あればいいのであるが、国道でもないらしくバスも通っている気配なく、三叉路を左すれば大きな道でやがて栃木峠と木の芽峠の分岐点に至る。左に向へば栃木峠、茶店など旧姿も修復されている部分もあるようであるが、国道が大修理されていて旧街道の面影は少く、旧北陸道で近江へ抜ける道で芭蕉主従はそれぞれ通っていない道なので、ともあれ右に向って木の芽峠を目指す。舗装された道であるけれど、車やバスはほとんど姿を見せない。農業用の小型トラクターが時々姿を見せるだけの山わきの野道である。農家が道筋に点在する、それぞれ手が加えられて近代化した風情もうかがえるが、基本的には戦前の農家の趣きを残している。南条からの街道沿いの古い家々の標札を見ていて気付いたのであるが、何々兵衛とか何々衛門とか何々之介とか何々之丞とかという一昔前の古風な名前が多く、その大きい標札の脇に今流の名前の標札が掲示してあるのもある。昨日、湯尾の集落に入ったところで、平坦な街道を歩き疲れて腰を掛ける石を探して右脇の小さな坂の石段を降りかけたところに、小さな石碑があり、そこに「初音の小坂」という説明板が建てられており、その石段を降りたところに建っていた家も古風だったなと思ひ出す。由紀さんが、この石塔はよく見落すそうですよと大よろこびであった、「初音の小坂」の由来は、由紀さんにその存在を教え下さった敦賀の川上季石先生の著『芭蕉越前を歩く―季

石手帖より―』平成六年十一月刊 に見える。鶯の関を詠んだ古歌「鶯の啼きつる声にしきられて 行もやられぬ関の原哉」（方角抄）にちなんで、この小坂で鶯の初音を聞いたと言うのである、今は一般の民家に向って降りる石段まじりの小坂であるが、昔の街道の一つであったのかも知れない。それはそれとして、そのあたりに軒を並べる民家の標札が全て古趣豊かな名前なのである。一軒一軒の街道添いの家々にも、歴史の移り香がうかがえるのである。今まで街道を歩いていてあまり気付かなかったことであるが、福井県の風でもあるのであろうか。

今庄の宿場の町外れ南端の小山、藤倉山の峯続きの二百七十米あまりの小山が燧ヶ城跡という、濃い緑に覆われた山城で、一見したところ城塞という感じはしないけれど、木曾義仲が寿永二年に築城し、平家軍十万と戦って敗れたと伝えられるところ、山に登れば今も石垣・空堀・切り堀が残存しているようであるが、見物のための登山には至らない、木の芽峠が待ち構えているからである。可能なだけ鹿蒜川沿いの旧道に沿って歩き始める、五万分の一の地図で見ると鹿蒜川上流の大桐という集落まで舗装された新道が出来上っているようであるが（大桐から先は山中隧道を経て日本海に抜けるのである。）とにかく旧道らしきを辿ることである。城跡の麓にあたる草むらの中に「こつら清水」という小さな石彫りの不動明王を安置してある湧水がある、

年中冷たい水が絶えることなく、妊婦がこの水を飲むと安産であると伝誦されているとか、夏の熱氣と繁茂する雑草木に冷水も泡立つ感じで赤茶けた濁りも浮んでいて、試飲するには及ばない、芭蕉たちは喉の渴きを癒したかも知れないけれど。

南今庄の小集落の入口の右手の山麓に鹿森神社を拝する、辟地と言ってもいい山村の集落の社としては、鳥居も玉垣も神殿も立派なものである。神社の森も鬱蒼と奥深い、汗まみれの一行にとっては一休みに好適也と玉垣に腰をおろす。神社の隣りに在る農家も、この暑さの中で森閑としている、純粹な農家というのはいま存在していないのかも知れないのであるが、とにかく人影は少い。新道という集落の庭先で農作物を乾かしておられる老女に木の芽峠の道を聞くと、右手の小道を登れと言われる、冷たいお水の御馳走になって舗装されている小道を前進。老女は、このお家の人も木の芽峠を越えて敦賀との物資の流通に従事していたと語られる、明治から大正にかけてのお話しのようである。立派な構えの農家なのであるが、どういう形態でどんな物資を運んでおられたのか聞き取るに至らない。

炎熱の暑さの中を鉢伏山（七百六十一・八米）の方向に向って新しく舗装された道を登っていくと、太陽の照り返しが激しくて、足首もガタガタになって難行苦行の行脚である。旧道は寸断されて舗装道が作られているようで、歩

くのは山の地勢に従ってウネウネ続く自然道の方が楽なのだと思うことである。しばらく登ると一ツ屋と呼ぶ三、四軒の家のある小集落——江戸期には木の芽峠の手前にある小さな宿場で、番屋の機能も果たしていたのかも知れない——を通り過ぎて、人家一つない舗装された山道を小一里登ると、道路の工事中の場所に行き当る。清冽な山水が吹き出すところにカンビールやらカンジュースやらが冷やしており、工事中の人が一休みして昼食中である。私どももカンビールやらジュースやらコーラやらのお裾分けを頂戴しながら、持参のパンで飯の昼食で一休み。左手の方に新しい道が作られているが、右手の小さな谷沿いに山道が入山禁止と見える、これが旧の木の芽峠道と言う。綱が張っている場所から覗いて見ると、細い旧道が直線に登っていてウネウネ続いている、危険な道というのでもなさそうなので旧道に入り込む。草が厚く深く茂っている道であるが、舗装された道に比べると歩き易く、一行は今までは楽々とピクニック気分で路傍の草木を賞でながらの登り道である。ほんのしばらく登ったところで、突然に山道が消えて了い、山の地肌がむき出しで広く斜めに切り崩されているところに出る、木は切り倒され土が露出して痛々しいと言う風情である。方向を見失ない途方にくれていると、営林署の職員の人がタマタマ通りかかれ、ここはスキー場として造成中で、昔の街道は全て消滅していると話される。

ガツクリである、とにかく言奈地蔵のあるところまで平坦な急斜面を案内して下さる。この人に会わなかったら、遭難騒ぎを起こしたかも知れません。

急斜面を尾根まで登り切ると広々とした山並みが見渡せる、尾根伝いの右手斜面に細い山道が見える、滑落するの用心しながらその山腹を横切る山道をしばらく進むと小さな祠堂の前に出る。言奈地蔵と呼ばれている地蔵堂で、伝誦では「昔、権六という馬子が旅人を殺し、金を奪いました。そばに地蔵がいたので「地蔵いうなよ」と口止めしたところ、「地蔵言わぬが我れ言うな」と言われ山をおりました。その後この峠で若い旅人と出会い、それがかつて殺した旅人の息子であるを知り、因縁におののいた権六は自ら仇を討たれたと云います。」とある、この地蔵堂まで営林署の人が送って下さった、危険だと思われたのもあるが、親切なことである。一同感謝感激雨霰で、パチパチ写真を撮りまくっている。帰広後に写真を送りますというのである。言奈地蔵から灌木の茂った山道を少し辿ると丸石を敷いた石畳の坂道に出る。この坂道を登り切ると木の芽峠の頂上で、右手の小さな広場には道元禅師往來を顕彰する巨大な石碑が建立されており、左手には古い形をそのまま残した草葺きの茶屋が健在である。木の芽峠は、福井県の嶺北と嶺南（福井の天気予報はこの言葉で分けられている。）を分ける要地で、天長七年に上毛野陸奥公山が開

いたと伝えられ、茶屋の主は前川氏、「平貞盛を祖先として現当主正盛四十二代、五一八年の長きに達する。戦国大名として各地に転戦したが、二十六代義次にいたって木ノ芽峠に定住する。越前藩主松平秀康が仕官を勧めるが辞退し、茶屋番・山回り役として残った。」とある。今様の土産物を土間に置いてある茶屋の中に入ると、奥の間のいろりに火が燃えていて湯が湧いている。盛夏なのに、いろいろの火が欲しいという温度なのである。私もはせっせと山道を登ってきたので汗ビツシヨリであるが、一休みすると冷気が心地よい。数人の山仲間といった若い人たちが当代の前川さんを囲んで談笑中である。作務衣姿の前川永運さんは、この茶屋の由緒を語って下さる。豊臣秀吉が天正元年朝倉討伐のうちに前川家に立ち寄って贈ったという豊太閤の茶釜も置いてある、尾張国住人釜屋与治郎の作で逸品という、眉唾也と思うのは下賤なる輩と申すべきでありましょう。この茶屋は最近昔のままに再建されたようで大変な費用がかかったと思われるが、前川さん所有の山がスキー場として開発されて大金がころがり込んだとかいう噂話を今庄の下界で聞いたようでもある。そんな下世話な裏話とはもあれ、この人里離れた峠道に茶屋を保存維持されていることはありがたいことである。生活必需品は裏手に新しく敦賀行きの道が出来ており、車で求めに行くとか、峠道を登り降りするのではなさそうである。生活必需の水は、

敦賀寄りに下ったところに御膳水という清冽な山水が出ており、そこには明治天皇行在所碑が建立されている、飲料水には不自由しないようであるが、お風呂などはどうしておられるのか。そこまでは追求し得なかった。

前川家周辺の小高い山々には中世の山城跡が数ヶ所（鉢伏城址・観音寺丸城址・木ノ芽城址・西光寺丸城址など）あるようであるが、これ以上登り道は閉口也とて、敦賀への峠道を降り始める。石畳のある道少しで、直線的な山道となる、自然にトントんと飛びおる形になるくらいの急坂である。ところどころに巨大な岩石が行く手をさえぎって、その屹立する岩石をめぐって山道が屈曲する、ほの暗いほどに木々の繁茂した山道はジメジメと湿った細い岨道である。ツルリツルリと滑り易く不安定な道であり、勢いあまた同行者の何人かは盛大な尻餅をついていたようである。これは相当な地鳴りを生じ、奥深く閑寂な木々の間を切り裂くような甲高い声があがっている。笑い声も時に混じているが、それぞれ危険を感じながらの下り道なので、アレアレと同情の想いのこもった笑い声である。靴もズブ濡れという状況で、泥まみれ。半里以上も木立の中をくぐって降りると、急に視界が開かれて道も広くなる。新保という集落にかかる、元治元年木ノ芽峠を越えた武田耕雲斎率いる水戸天狗党八百二十余名は、新保で宿陣を設営、ここで加賀藩に降伏している。本陣的構えの宿陣跡は現存して標

識も建ててある。このような僻地でも幕末の動乱は及んでいるのであるが、当時の木ノ芽峠越えの街道は、裏日本最大の主要港であった敦賀へ嶺北から抜ける唯一の大切な道であったのであるから、それも当然とは言える。今では何本ものトンネルが嶺北と嶺南を結んでいるのである。

新保の集落を抜けたところに小さな待合室付のバス停がある、木ノ芽川の上流である。朝九時から十二分に歩いて、敦賀市内までの数キロを歩き続ける気力喪失で、一日数回しかないバスを待つこととする、午後三時過ぎごろである。のんびりと時間前に到着したバスは、他の乗客皆無に近く、私も一行様の貸切バスとなり、木の芽川沿いに敦賀市内に向う。今夜の宿である福井厚生年金健康福祉センター・サンピア敦賀で一休み後、随行日記によれば芭蕉に先行した曾良も種ヶ浜の帰途立ち寄ったと言う西福寺に向う、敦賀市の郊外なのでタクシー利用である。勅願所大原山西福寺は浄土宗の名刹で、正平二十三年開山良如上人によつて堂塔完備、数次の火災などで原形は失せているようであるが、北陸の名刹としての偉容を今に伝える。由紀さんが前もって見学のお願いをしておいてくれたらしいのであるが、拝観料受領後は勝手に寺内を見学なさいと説明もなにもなしで愛想のないことである。書院から眺められる西福寺庭園がもっとも著名で昭和七年に文部省から名勝として指定されている、勝手次第たるべしで書院から庭

園に入つて散策する。自然の山容を利用して築山を作り、定法通りに心字池があつて、一寸荒廃気味（雑草繁茂で）であるが規模宏壮で繊細な技巧を加えた庭園である。廊下伝いに阿弥陀堂と四修廊がある、文禄二年中興道残上人が朝倉氏在城の一乗谷から移築したものと伝えられ、建築様式も古く福井県の文化財に指定されているという。ミシミシと廊下がキシム様子があつて、古い建物であることは納得できる。ここも拝観勝手たるべしで、仏像などをシゲシゲと見廻ることであるが、猫に小判という感じがなくてもない。夕景迫つてサンピア敦賀へ、そのままベツトへ沈没であるが、若い人は町中へ出かけたようでもある。木の芽峠越えの残影が色濃い老化現象顕著な私と、ピチピチギヤルの違いは止むを得ないことである。

二

九月一日火曜日、快晴。敦賀の人となつてゐる由紀さんの案内で敦賀市内の行脚、まずは氣比神宮参拝である。敦賀に到着した芭蕉は、その夜のうちに氣比神宮に参拝している。十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜、月殊晴たり。「あすの夜もかくあるべきにや」といへば、「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と。あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。とある、名月の夜であつたのであらう、そこで遊行の砂持行事の話を聞い

ている。北陸道総鎮守としての氣比神宮は、戦前その威容を誇つていたのであるが、昭和二十年七月十二日の空襲によつて焼失してしまつてゐる。現在は着々と再建が進んで、十数年前に敦賀から大垣まで行脚した時に拝観したものより周囲の様子が整備されており、「昭和の大造営」が完成しつつある感じである。ただし神さびたという風情は残念ながら感得しえない、芭蕉の受けた感銘とはまた異つたものがあるであらう。

次に由紀さんの先導で敦賀の俳人の指導者川上季石先生宅を訪問、川上医院という大きな病院の院長さんでもある川上先生は、由紀さんにとつて「おくのほそ道」講座の先生でもあるらしい。立派な和風応接室の床の間に芭蕉真筆という伝誦の「なみだしくや遊行のもてる砂の露」の短冊が、私どものために特別に掲げてある。『おくのほそ道』の句、「月清し遊行の持てる砂の上」の祖型ということになる。氣比神宮の勧進元でもあられる季石先生が、戦災で全焼した神宮再建に力を尽され、何かの縁で入手されたものなのであつて、出所は由緒正しいようである。真蹟かどうかは私どもに判定出来ないが、古態を存した短冊で芭蕉の筆癖はうかがえるようである。季石先生に敦賀での芭蕉の足跡についてお話しをうかがい、市内行脚にと出立。まずは近くの氣比の松原見学。三保の松原、虹の松原と並んで日本の三大松原の一つとか、敦賀湾に面した松原で、

白砂青松と申すべきでありましょう。敦賀原発が湾口に位置しているのであるが、海の色は青く澄み切っていて白砂に打ち寄せる波も静かである。

氣比の松原から敦賀湾沿いに筈の川を渡って、敦賀の東端に位置する金ヶ崎城跡に向う。途中相生町（唐仁橋町）の一隅に天屋玄流の旧宅跡がある、芭蕉が福井から同行した神戸洞哉と一緒に投宿したと伝えられるのは出雲屋弥市郎で、その旧跡は相生町の梅田食堂あたりらしく、「芭蕉翁逗留出雲屋跡」という石碑が建っているが、ここには「おくのほそ道天屋玄流旧居跡」という小さな石碑が荒廃した旧宅の庭先に建ててある。旧宅と申しても明治になって建てた練瓦造りの立派なもので、今は人の住んでおられない氣配はなく、貴重な歴史的建造物ということであろうか。子孫の方は別のところに医業を営んで住んでおられるとか、江戸期は敦賀の廻船問屋の屋敷や倉庫が櫛比していた中心のようである。近くに敦賀市立歴史民俗資料館があつて見学する、敦賀の歴史をたどることは出来るけれども、芭蕉関係の目新しい資料は見当らない。『敦賀の歴史』敦賀市史編さん委員会 という本を見つけて購入、若狭の要衝敦賀の上代からの歴史を読みとることである、松尾芭蕉の来敦と敦賀の俳人¹の一章が設けられていることは、敦賀における芭蕉の史的位置の高さを物語っている。

金ヶ崎城跡へと歩く途次、種ヶ浜行きの渡船場に行き当

り、便船の時間を聞くと九月になって閉店也とのこと、海水浴客がなくなってしまうかららしい。ハテと困却して由紀さんが何かと交渉してくれている間に、ピチピチギヤルのために特別仕立て出航させましょうと約束が出来て、金前寺と金崎宮参拝にと勇躍出発である。金前寺には鐘塚とも呼ばれる「月いづく鐘は沈める海の底」の句碑（宝暦十年に敦賀の俳人白崎琴路などの手によって建立²）がある、十数年前に訪問した時には戦災で丸焼けになった後に小さなお堂が再建されており、これも戦火に焼かれた句碑について和尚さんが一生懸命に解説して下さったことを想起するのであるが、今は近代工法の大きな本堂が再建されていて圧倒される。石碑は昔のまま、そのあたりを古趣を求めてウロウロしていると、これも近代建築の庫裏から老和尚がお孫さんを抱いて出て来られた。十数年前の精氣盛んな和尚さん、念願の本堂再建の偉業をなし遂げて一安心という様子、戦前の盛時を示す金前寺の写真を示しながら、今と昔の違いについて何かと話して下さる。門信徒がさほど多くもないお寺とのこと、再建の苦心談はいろいろあるのであろうと察せられることである。天平八年僧泰澄創建と伝えられるが、中世から近世にかけて栄枯盛衰を重ねて今に至っているのである。私どもには戦火に焼かれてボロボロになっている鐘塚が印象深いわけではあるけれど、その鐘塚も一つの歴史の証言にすぎないのである。

金前寺を通り過ぎて敦賀湾に突き出ている天筒山（百七十一米三）の尾根にあたる小山に鎮座する金ヶ崎宮（祭神は後醍醐天皇の皇子恒良親王・尊良親王である。）、太平記以来の歴史を有する金ヶ崎城址に位置している。全山に城址としての遺構が残っており、小道を辿れば全体が公園化されていることが判る。断崖絶壁の城址の裏手から福浦湾を臨めば、北陸電力の火力発電所の石炭集積場とか敦賀セメントの工場群がうかがえて、経済大国日本の底辺を見る思いがするのであるが、沈鐘伝説の海はどこかなと思うと伝説と経済の両立はむづかしいことだと思うのである。

予約通り渡船で種ヶ浜に向う、相当な高齢な船頭さんが白波をけたてて種ヶ浜へ直行便である。敦賀湾を北上するのであるが、ところどころに赤茶けた鮮明な色彩のブイが浮いているので何かと聞いてみると、敦賀湾口西側の突端にある立石岬に立地する敦賀原発から排出する可能性のある放射能を調査するための検知器を浮かべるブイとのこと、果して本当かどうか知らないが、芭蕉が「種の浜に舟を走す。海上七里あり。——略——僕あまた舟にとり乗せて、追ひ風、時の間に吹き着きぬ。」と描写した敦賀湾の自然も、近代文明の汚染が及んでいるというのであろうか。若狭湾の豊かな海産物が、何時までも新鮮な美味を提供し続けてくれることを祈ることである。

種ヶ浜の遊三閣という民宿、九月一日なのにシーズン外

れなのであろうか、私ども御一行様の借り切りという有様、朝から敦賀市内を散々行脚したので御一行様疲労困憊、ところが元氣潑刺の三名ばかりの学生が、それもスラリとスタイルのよろしいのが海水着に着替えてダイビング。種ヶ浜は海水浴場であるとパンフレットにあったので前もって準備していたらしい、シーズン外れの美女三名、漁師さんたちが海岸に立ち並んで吃驚見物である。種ヶ浜には羽衣伝説はないけれど、近代の天使来迎と思つたのかも知れない。

種ヶ浜行の渡船場の近くにあった敦賀酒造——罹災しなかったのか古い構えの店頭であつた——の福寿杯という銘酒を片手に、海産物豊富な民宿の素朴な夕食に満腹して、海から吹き込む涼風を待望しながら熟睡である。九月でも、北陸の海辺でも、暑熱なのである。

三

九月二日水曜日、快晴。「侘しき法花寺あり。」と芭蕉が記した本隆寺は、現在でも寺院と呼ぶよりは説教場と呼ぶがふさわしい構えである。京都大本山本能寺末寺 法華宗 本隆寺と呼ぶ、本堂前には「小萩ちれ」の句碑があることは昔日のごとしであるが、本堂など十数年前に訪れた時に比べると大構えになっている感じ、芭蕉の杖蹟というので訪問する人も多く、喜捨の奉納も多くなっているのかと下衆のかんぐりをするのである。本堂内には洞哉の筆に

なる一文、「其日のあらまし等裁に筆をとらせて寺に残す。」と記したものが掛軸に表装されて展示、その上多くの俳人たちの発句の短冊―芭蕉を慕って種ヶ浜訪問時の感興の発句なのであろう―が掲示されている。観光客向けにあれこれ工夫をこらしておられるようで、私どもにとってはありがたいことである。私自身には懐古の気分がないことはないのではあるが。

色の集落には、若狭湾沿岸一帯に伝わる産小屋の習俗を示す建物が現存するというので見学に行く。芭蕉たちにとっては珍らしいことでも何でもないのに、見物などいうことはなかったであろうが、私どもにとっては好奇の素材で、諸方で廢滅している木造平屋で建坪二十平方メートルばかりの粗末な産小屋が建っている。産血の汚れを忌むという習俗が、お産の時に使用する小屋として集落の外れに建てられたもののようである。産血を忌むというのは漁師さんたちの習俗なのであろうか、色の集落が僻地であるが故に産小屋も残存したのであろう。まずほの小貝は採集するに至らなかったけれど、浜辺にも数少くなっているという産小屋見学は、『おくのほそ道』後追行脚の余徳である。

色から敦賀への渡船は航行中止也、敦賀半島東岸を常宮經由敦賀行バスは一日二回、これでは夕刻まで待たねばならないというので、止むなくタクシーを呼んでもらう。敦賀半島を色から常宮まで海岸沿いに南下するのであるが、

江戸期には蝶螺が岳（六百八十五米）や西方が岳（七百六十四米）などの連山の断崖が海に迫っていて大変な難路であったようで、陸路より海路ということであった。現在ではマアマアの道路が開発されていて、たちまち常宮である。氣比神宮の奥宮としての常宮神社が鎮座しますところ、七月二十二日の例祭では氣比神宮の神々が御神輿で渡船するという、「雄壮でロマンチックな祭」とのこと、厳島神社の地御前へ渡船する管絃祭を想起するが、果してどんな祭りなのであろうか。国宝の朝鮮鐘は、太和七年三月の銘のある名鐘で慶長二年に敦賀城主大谷吉継が豊太閤の命により寄進したものと伝えられている、豊臣秀吉の暴挙である朝鮮征伐の時の戦利品であらう。天女二体の浮彫は珍らしい、大陸の風であらう。

J R敦賀駅前のいかほどか新開地風―江戸的風趣を残す町並は戦災で全て焼失したという、現在の町は戦後建てられたものの―の街の中に三三五五に土産物を求めて散開、しかし歸心矢のごとしでそそくさと特急雷鳥に乗り込み京都まで、京都からは一路新幹線で広島である。昨日、渡船の埠頭で別れた由紀さんに感謝しながら、よく歩いた行脚也と話し合ったことである。

この度の行脚に参加した者、OG高橋由紀、滝川文子の兩人に荒木志保、川崎尚子、仙波佐保、神浦直美、川崎みほ、盛田みどり、山根秀子、三宅真琴、柳浦真帆、田倉澄

子、大島素子、中尾洋子、中島ゆみえ、原田久美子、平尾さつきの諸嬢である。

追記「遊行の砂持」

敦賀の気比明神で、芭蕉は

○月清し遊行のもてる砂の上

という句を残している、十四日の夕暮れに敦賀に到着した芭蕉は、晴れた夜の名月を賞して気比明神の社頭に案内される、社前の白砂が「霜を敷るごとし」と観じて「往昔、遊行二世の上人大願発起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ泥濘をかわかせて参詣往来の煩なし。古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。「これを遊行の砂持と申侍る」と亭主のかたりける。」ということとなる。『おくのほそ道』の記述と、芭蕉に先行しながら金子壹両を芭蕉のために出雲屋弥市良へ託した曾良の随行日記の記録と重ね合せると、出雲屋弥市良、天屋五郎右衛門、大和屋久兵衛たちが芭蕉の案内に当たったに違いなかったが、これら敦賀の有力商人であったであろう案内者が、こもごも遊行の砂持の伝誦を語ってくれ、その内容が芭蕉にとって印象深く、『おくのほそ道』には珍らしく神事の詳細を記述することとなったのであろう。

十数年以前のこと、敦賀から大垣まで行脚したことがあ

るけれど、その時も気比神宮に参詣した。北陸の一の宮であつたにもかかわらず、その当時は戦災焼失後の再建途次であつたらしく、真新しい本殿が出現していたけれど、神札をいただくにもお札所に神子さんの姿は見えず、近所の奥さんみたいな方が走ってこられて応待して下さるという有様、回廊も神垣も未完成で、ウロウロしていると本殿の左手の垣の向うに砂がうず高く盛られており、白い布袋に砂が入れたのも見当るといふことで、本殿前で何か砂持に関する神事が行われて、その結果としてここに砂が棄てられているのかと考え、近所の奥さん（宮司さんの奥様であつたかも知れないが）らしきに質問したけれどよく判らず、あれやこれやから遊行の砂持神事の有様を想い描くことであつた。注釈書類には砂持神事についての具体的記述は見られないので、オボロオボロの想像に止まるばかり、隔靴搔痒の感は免かれないのである。

平成六年の五月十五日の日曜日、十一年ぶりに御砂持神事が行なわれるので見学に来ないかと、高橋由紀さんから連絡いただいた。遊行上人の代替りの時しか行なわれない神事であるから、好機逸すべからずで、敦賀参上ということとする。一人では何とも手持ぶさた也とて、娘同伴ということで計画する。五月十四日に前夜祭があるというので、十四日早朝出発、昼前に敦賀着、由紀さんの案内で敦賀市内見学。只今のところジャーナリストの注視の的は桜田淳

子さんのアパート也と、敦賀の名物そば屋で昼食の時にマンションを指さす。TVクルーが随分群がっていたそうであるが、今は大分下火で洗濯ものがどうかとか赤ちゃんの泣声がどうかとか物見高い噂がチョコチョコあるぐらいで、沈静化の傾向にあるそうである。ともあれ桜田さんの統一教会関連のニュースは全国版であるが、御砂持神事は地方新聞の地方版でなくては扱かわれることはなくて、由紀さんが敦賀の疋田発で連絡してくれなかったら、全く知らないままに見過してしまっていただろう。

氣比の松原で快晴の海波を賞して来迎寺⁽³⁾、御砂持神事の行列が発するの、来迎寺の寺域にある西方寺からである。時宗の西方寺は、元来氣比神宮の前に広い町を形成している門前町の一隅にあったようであるが、戦災で焼失後に来迎寺域内に移転したようで、一般の民家風のたたずまいでお寺とは思えない。大変大きな構えである来迎寺に身を寄せたという感じで、玄関前に砂持ち行事の記念碑が建てられている。今では来迎寺住職が兼務という。この来迎寺は、幕末に武田耕雲斎を盟主とする天狗党の水戸浪士三百五十三名が処刑されたところであり、来迎寺裏に立派な墓がある、水戸在の一族の寄進した燈籠も立ち並び、幕末動乱の悲劇的な顛末がうかがえるたたずまいである。浪士たちを祭る松原神社も鎮座し、巨大な松がそびえて百数十年の歴史の流れを実感させられる。松島町の川上正志先生

(俳名季石)のお宅にうかがう、川上先生はこの度の御砂持神事の実行委員会の会長さんとして多々忙々で御不在であった。

次に出かけた相生町にある敦賀市立博物館では、御砂持記念として遊行寺宝物展が開催されている、一遍上人絵詞伝などという寺宝が展示されており、歌書や連歌書も展示されていたが、近世のものは見当らなくて、猫に小判也である。

氣比神宮周辺の宿所は今回の神事に参加する団体で満員とかで、少し町外れの古田荻四丁目というところに新しく建てられているビジネスホテルであるHOTEL α 敦賀バイパスに宿ることとなっている。昼間は快晴であったのに、夕方から雲行きがややしくなつて雨まじりの風が吹いてきている。「越路の習ひ、なほ明夜の陰晴はかりがたし。」との芭蕉の記述は、今の世でも通用するのであろうかと、明日の雲行きを案ずることである。

前夜祭というのが、氣比神宮前の門前町で行なわれるという、夕食後に由紀さんの出迎えで門前町(本町というようであるが)に出かけたのだけれど、雨がポツリポツリと降り始め、それだけでなく相当強い風が吹き始めていた。正に「陰晴はかりがたし」で、桜田淳子さんのマンションを青空のもとに仰いだのは今日のことではなかったかいなという感じである。前夜祭の氣比神宮前的大通り(神樂通りというらしい)は、交通止めになつていて夜店が少々、

各商店は総出で接待係りという有様で、本業の方は少々お留守になっていて喫茶店は大よそ閉店という具合で、接待の茶を飲みながらの長時間の立見は相当な労働である。前夜祭というのは、町興しのために今回初めて企画されたものとかで、念仏踊りと太鼓の競演であった。福井新聞の地方版で見ると、前夜のこと武生市の総社大神宮で遊行上人を迎えて時宗の「おどり念仏」が奉納されたとあるが、それが再びこの神宮前広場で興行されたのである。北陸各地に伝わる念仏踊りが、多様に演出されて興があったが、一つ一つの特長についてはここに再現する筆力を有しない。子供たちが中心のもの、老人が中心のもの、若い婦人が中心のものと、その踊り集団にそれぞれ特長があつて面白い。老若善男女が信仰とともに伝承してきた民俗芸能と言えるのであるう、群舞とリズム感のある念仏とが一体となつて一種の陶酔境に入れるのではなからうか。太鼓の競演も多様で、敦賀女子短大（作家の瀬戸内寂聴さんが一時学長であつた短大）の学生も法被に股引姿で参加したりで、上手とか下手とかは通り越して市民は大喜び、人間には一寸した色模様も必要なのである。ある女性集団の群れ太鼓打ちの最中、地面にあるものを巻き上げるような強風が吹いてきて、大きな看板が水平に飛んで来て女性リーダーの頭を直撃するという事故発生には驚いた。しばらく失心状態であつたが、水を頭に注いでもらつて起き上がり、すぐに太鼓打ち

に参加して大喝采、後で鞭打ち症の後遺症が残らなければいいがといらざる心配をするほどに強烈な風ではありましたが。それにしてもラグビーで倒れた時に魔法の水とかがヤカンで頭にぶっかけられているが、こんな時でも魔法の水治療法は有効なようである。

ともあれ強風と聚雨の荒れ模様で、明日の天気の方が心配になつてくる有様で少々硬直状態の足を引きずつて宿舎に引きあげることである。実行委員会の川上先生やら市長さんやらは、川上正志作詞、三橋昌幸作曲のお砂持ちの唄をカラオケ風に披露されたり、夜おそくまで大活躍であつたが、まずは黙礼して失礼した次第。

五月十五日、日曜日。心配した通りに強風と雨の生憎の空模様、旅のこととて十分なる雨装束とてなく、由紀さんの出迎えの車で来迎寺へ向う。来迎寺は本堂も庫裡も別棟の沢山の御堂もお砂持神事の行列に参加する人たちが次から次に集まつてきていて大雑踏である。「遊行上人御砂持神事日程（プログラム）」は次のように決められている。

- 七時〇〇 稚児参加者集合（来迎寺）
- 八時〇〇 一般参加者集合（来迎寺）
- 九時三〇 行列出発
- 一〇時〇〇 御砂場到着（松栄町）
- 一〇時三〇 御砂場出発
- 一一時三〇 気比神宮到着

一二時〇〇 稚児解散

一二時三〇 西方寺跡よりカゴにて出発（商工会議所前）

一三時〇〇 氣比神宮にて神事

一四時三〇 西方寺出発（氣比神宮出発）

一五時〇〇 税関前棧橋より御船出発

一六時〇〇 常宮棧橋到着

一七時〇〇 解散

稚児参集というのが大変、あちこちの溜り場で一家中総出で着がえなくてはならない、お化粧もしなくてはならない、雨降りの中をアチコチ飛び廻っておられる顔には、笑い顔もあるけれど泣き顔もありで、一寸殺氣立っている様で血走った目付の人もいる。稚子装束は男子用も女子用も一般によく見かけるものであるが、頭に乘せる冠りものが特長的で、小さめで上が平らな菅笠なのである。大亀の棲む沼を埋め立てたというのが御砂持神事の由来であるから、労働用の装束の名残りとして菅笠があるのである。一般の人の装束は、白衣に菅笠で草鞋ばきである、労働姿の再現としての装束なのである。

雨中で九時過ぎ頃に行列を作るよう世話人がマイク片手に歩き廻っているが、予行演習もなかったことで大混雑、その間に遊行上人が西方寺に到着して仏事が修される。そして若い山伏姿の先導者のホラ貝の合図で出発、稚児には傘を差しかける保護者が沢山で、大行列の行進である。こ

の行列の並び方には順序がある、古例は氣比神宮前の神樂通りの端にある旧西方寺から出発したようであるが、戦災で氣比神宮の古文書が全て焼失して、その詳細の記録はないようである。戦後の昭和三十一年四月二十九日と昭和五十八年五月十五日とに御砂持神事があったようで、『敦賀郡誌』山本著大正四年刊の「砂持の神事」などを参照したかと思われる行事が執行されたようである。昭和五十八年と平成六年との神事については、御砂持実行委員会の会長である川上正志先生の近著『芭蕉越前を歩く―季石手帖より―』に詳細である。昭和五十八年の行列の総数は五百七十名余とあるが、それは先達とか露払いとか稚児とかそれぞれ正式の役目のある行列の人数で、稚児の保護者などを含めると千名を越す大行列ということになると思われる。人がウヨウヨと存在するのである。私どものような単なる見物人を含めての話ではあるが。砂持の簀を奉ずる人は、全国の各地から信者団体として集まってきているように、氣比神宮周辺の旅館やホテルが満員札止めだったのはそのせいであるらしい。一寸耳をすますと、四国や九州やからの人かと思われる会話が飛び込んでくる、信者仲間では広くこの行事のことが知れわたっているようなのである。

この行列は、来迎寺前を出発して笹の川に架る松島橋の手前で左折し、笹の川の土手を港に向かい、港口の松島橋

を渡って敦賀港の西端にある松栄の浜の御砂場に達し、かつて金前寺に向った道を通ってコの字型に市内を廻り、神楽通りを堂々に行進して気比神宮に達するのである。これも季石先生の著書に図解入りで明示してある。西方寺が神楽通りの西端、今の敦賀署のところにあった戦前まではまた別の行列の路があったのであろう。浜に出て砂を集めて運ぶという行事が付随していたことは当然のこととて、いずれにしても相当な距離を行進しなくてはならず、稚児連中が保護者にダツコにオンブでという状況が見られるのは昔も今も変らなかつたのではなからうか。

ところで当日は雨とともに強風が吹き荒れて、私どもは松原橋の手前で傘を吹き飛ばされて了い、行列の人たちも白衣がビシヨヌレで幟も引きちぎれているという有様、菅笠を風に飛ばされないよう両手でおさえての行列、私はとてもその後を追っていく元気が失せて、ウロウロしている間に由紀さんともはぐれてしまう。人出が多いとは言っても人口が十方に達しない小都市で、それっきり行列が終わってしまうまではぐれつぱなしというのもシマラナイ話して、松原橋を渡って土手を行く行列を眺めながらタクシーで気比神宮に直行する。神楽通りの商店街の人たちは総出で奉仕であるらしく、喫茶店も平常通りではない、一軒だけ裏通りに見られた店に立ち寄り、お願いしてコーヒー一杯にありつく。行列が神楽通りに着くには時間がかかりました、

ずい分の時間が経って御一行様が御到着、大鳥居に入って太鼓橋を渡って右側の少し窪んだ空地にうやうやしく運んできた砂を撒いている、港湾の砂をこの窪地に運ぶ行事が、御砂持神事なのである。その神事に付随した供奉の人とその他の関連行事がふくれあがって目前にするような大行列になつたのではないか、通りには町の見物人が群がって知り合いの人が行列の中に居ると声を掛け合っている。厳粛なる神事と申すより、町の祭礼といった雰囲気もただよってくるようである。

砂を運び終ると稚児解散、この頃になると雨が止んで薄日が差してくる有様で風も凪いできた、御砂持神事の行列の時だけの強風と驟雨で荒ぶる神の顕現のごとしで、かつて沼に棲んでいたという大亀の身震いでもありませんうか。白衣の供奉の人たちは、駕籠をかつて旧の西方寺跡に向い、そこから再び遊行上人をお連れする行事となる。その間ボンヤリと見物していたところ、由紀さんの友人という人が声をかけて下さり、境内で再会。由紀さんは供奉の人に混じって砂も運んできたという、あの嵐の中を元氣のいいことである。駕籠で迎えた遊行上人が主催しての神事が立派に再建（平成四年修築完了）された本殿の中で行われる、沢山の善男善女が本殿内に物見高く入り込んで報道陣とオシアイヘシアイ大混乱で、神事の様子を十分に拝することができなかつた。人垣の隙間からのぞいてみると、宮

司を始めとして町の有力者らしき人たちが左右に居並ぶ中で、座した遊行上人を中心に数名―五・六人だったか七・八人だったか、とにかくそれほど多い人数という感じはない集団であつた―の僧侶が、念仏踊りの原型かと思われるような単純な所作をくり返しているのであつた。全く同じ所作のくり返して遊行上人の周囲をめぐるっているので、厳肅と申せば厳肅、退屈と申せば退屈で、そんなことを申せば不敬にあたるのかなという態のものであつた。神社の本殿の中で念仏踊りを拝見したのは始めてのこと、中世以来の神仏習合の遺物を目のあたりにする思いであつた。

神事が終つた後、群衆がどつとくずれて行列となる、何ごとかと後に並んでみると、遊行上人が一人一人に護符を与えて下さっているのである。私たちもありがたく拝受。

この後で税関前棧橋からの常宮神社渡御の儀があるのであるが、定刻通りには進みませんで、帰広の時間も迫つてきて氣比神宮に別れを告げることである、この頃となると快晴という感じである、十分に観察するためにはもう一日宿泊すべきであつたと今にして思うことであるが、当初の計画通りに帰広してしまつたことである。応用動作不可也でした。

『おくのほそ道』で芭蕉は氣比神宮の御砂持神事のことを印象深く細叙している、それまで数多くの神社仏閣に参詣していながら、例えば室の八島にしても日光にしても、

立石寺にしても出羽三山にしても、その由来とか風物を細叙していても神事仏事に触れることはなかつた。氣比神宮の御砂持神事が芭蕉にとつて印象深かつたからこそ細述であつたはずであるが、芭蕉自身がその砂持神事を実見している可能性は少いようである。芭蕉が敦賀を訪れた元禄二年八月十四日から十八日ころまでの期間に、御砂持神事があつたという記録はない、川上季石先生の著書によれば、芭蕉が元禄二年（一六八九）八月この地に來たその年の四月二十二日に、遊行四十三代の尊真上人が、お砂持神事を行ったと言ひ伝えられている”ということ、芭蕉訪問時より四ヶ月前に御砂持神事が行なわれたのである。芭蕉は「亭主の語りける」ということで、氣比神宮の御砂持神事を知つたのである。その亭主の「語り」が印象深かつたのである、心に残つたのである、心に残る「語り」であつたのである。

平成六年の御砂持神事を拝見すると、敦賀の町を挙げて協賛する行事のようで、殊に町の有力者は何らかの意味で神事進行に重大な役割を荷わなくてはならず、物心ともに神事に参画しなくてはならないように見受けられた。芭蕉を敦賀で迎えた人たち、宿の亭主出雲屋弥市郎にしても、種が浜に案内した天屋玄流にしても、それぞれ敦賀では名ある町人であつたに違ひない、当然のことほんの少し前にあつた御砂持神事にはそれぞれの立場で實際に参加したに

違いなかった。そうした人たちの語る実体験談であつてみれば、神事の一種異様な熱気を芭蕉に目に見えるような躍動感をもって語り伝えたものではなかつたであらうか。その熱気が、芭蕉の表現をして生彩あらしめたものではなかつたか、『おくのほそ道』における異色の神事描写は、このようにして成立したとしてよさそうである。

平成六年のお砂持について、実行委員長の川上先生は次のような解説を書かれている。

遊行のお砂持について

御砂持実行委員会

実行委員長 川上正志

元禄二年八月十四日、芭蕉が奥の細道の途次、氣比神宮に夜参して詠んだ

なみだしくや遊行のもてる砂の露

(後に「月清し遊行のもてる砂の上」)

の句で知られているように、芭蕉をして感涙せしめた遊行砂持の源起は、正安三年(一三〇一)時宗の遊行二代他阿眞教上人が北陸巡錫の折とされている。当時氣比神宮西側は沼で、ここに大亀が棲み、埋立てることも出来ず、参詣の人々が難渋していると聞いた遊行上人は、翌日から浜の砂や石を運び沼を埋め始めた。これを見た町の衆が、遊

女に至るまで、砂運びに参加し、一週間余で沼を埋め立てた。そこに西門の参道が出来、やがて神楽町はじめ門前町が次第に発達した。

この後、時宗の法灯を継ぐ遊行上人は、任期中必ず一度、砂持行事を行う慣わしとなり、古例としてその伝統が受け継がれて来ている。

然し、これまでの記録や資料は、氣比宮社記中の記載や一部戦後の資料の他は、火災や戦災にて焼失している。ただ芭蕉が敦賀で杖を止めた元禄二年には、四月に遊行四十三代尊眞上人が砂持を行い、最近では、昭和三十一年四月二十九日、更に昭和五十八年五月十五日には、遊行七十二代一心上人が親修した。

この時から実行委員会が設置され、宗教行事は寺社、砂持の行列や関係の行事運営は、関係町内及び一般市民が担当した。

前回のお砂持は晴天に恵まれ、午前十時、行列は来迎寺方西方寺を出発、松栄、川崎、蓬萊、相生、神楽の各通りを経て、氣比神宮に至るコースであつた。氣比宮社記に「…遊行衆共自二濱邊一荷二運砂一先置三千中門之内一次運二置干西門繩手一次運三置干西方寺門前…」とあるように所定の場所各自砂を置いた。上人さまと重役の方は更に西方寺跡(現敦賀警察署)に行き砂を置く。終つて氣比宮本殿に参拝、お札渡し(御化益)が行われて、行列は解散となる。

午後は、お上人と、随行者が船で常宮に向う。辨天岩沖合で海上安全、海難、魚の供養の賦算^{ふさん}を行いつつ常宮に着き、常宮神社に参詣、上人の御歌奉納が行われる。帰路は車で金前寺、更に天満神社に参拝して行事が終る。

陸路の不便な時代は翌日常宮に参拝し、帰りも船路であり、二日掛りのお砂持だった。

砂持行列を略記すると

座検、先達、法羅貝、神楽太鼓、露払、一組稚児、寺院^{もつこ}簀、亀太夫、熊野證誠殿、御札箱、御番頭、お輿御尊体、朱傘、御相棒、蝶々稚児、大門稚児、導師稚児、御歛役、御砂ならし、大衆歛役、大衆お砂ならし、二組稚児、寺院簀、有志簀、参列者。

以上の順で砂持ちの行列が進むことは古くより変ることがない。

平成六年五月十五日行われるお砂持も、古例に則ることは勿論であり、時宗本山清浄光寺、遊行七十三代一雲上人の親修のもと、本山重役の方々、近郷の時宗数ヶ寺、熊野證誠殿が参加し、市内では、来迎寺、西方寺、及び各世話役、氣比神宮、常宮神社及び各総代、青年部、神楽町など関係町内、更に関係一般市民によって前回同様、実行委員会を設置し準備を進めている。今年は特に十四日に神楽町での前夜祭、市立博物館で五月一日より一ヶ月間遊行特別展が予定されている。また参加者は前回の倍が見込まれ、

行列は二隊に分れて出発するなど、古例を失わず、時代の新しい色調を加えて、伝統的町づくりの行事としたい。

平成六年五月十四日の中日新聞に「越前若狭歴史散策」という囲み記事があり、次のようである。お砂持神事の由来が、歌人の後藤安弘という人によって書かれている。

遊行第二世の逸話に由来

(お砂持ちの西方寺)

敦賀市松島二丁目の来迎寺境内にある時宗の寺。もとは神楽町の敦賀警察署付近にあり、昭和二十八年に現在地に移った。

正安三年(一三〇一年)、遊行(ゆぎょう)第二世・他阿真教(たあしんきょう)の巡礼行脚のとき、真言宗から改宗したという。同市井川の新善光寺も同時期の改宗で、ともにこの地方の時宗の拠点となった。

戦国時代、大本山清浄光寺が戦火に焼かれかかったとき、時宗の宝典ともいうべき時衆僧尼の「過去帳」二冊が西方寺に納められた。

この過去帳はその後、各地に持ち回られて数奇な運命をたどり、最後はもとの清浄光寺に戻った。が、一時的にせよ当寺にもたらされたのは、それだけ勢力を持った寺院だっ

たからであろう。天文年中（一五三二—五五年）に、朝倉氏から三百石の寺領が寄進されている。

話は前後するが、他阿真教は西方寺に滞在中、氣比神宮と寺の間が大きな沼のため、神宮参詣の人々が難儀しているのを見て、自ら土砂を運び道をつくった。これには町人たちもこぞって参加したという。

以後、時宗の法灯を継ぐ遊行上人は、任期中一度、巡礼の時に「お砂持ちの行事」を行う習わしとなった。

元禄二年（一六八九年）八月十四日、松尾芭蕉はおくのほそ道の旅の途中、敦賀に立ち寄った。たまたまこの年六月から九月にかけて、遊行第四十三世・尊真（そんしん）も西方寺に滞在していた。

このとき恐らく、お砂持ちの行事が行われたのであろう。芭蕉は「砂持ち」の話を宿の亭主から聞いて感動し、力を込めて書き留め、俳句に詠んでいる。

月清し遊行のもてる砂の上

このお砂持ちは近年では昭和五十八年、遊行第七十二世・一心によって行われた。ことし五月十五日、十一年ぶりに第七十三世・一雲によって行われる。

（歌人・「柊」発行人、後藤安弘）

五月十六日付の各紙の記事の中でもっともまとまっている中日新聞のものを次に転載する。

1000人越す大行列

（氣比神宮へ御砂持神事）

敦賀市の氣比神宮などで十五日、時宗の管長が交代するたびに行われる「御砂持（おすなもち）神事」が開かれた。昭和五十八年以来十一年ぶりの神事で、千人以上の大行列が市内を練り歩いた。

「御砂持神事」は、一遍上人の弟子で二代目管長の真教上人が鎌倉時代の一三〇一年（正安三年）、敦賀を訪れ、荒れていた氣比神宮の参道を、松原海岸の砂で修復したという故事にならい、管長が交代するたびに行われている。二年ほど前に、七十三代管長に一雲上人が就任したため、十一年ぶりに催されることになった。

この日は、神奈川県藤沢市の時宗の総本山、遊行寺から一雲上人や高僧、全国の信徒、地元から約三百人の稚児ら総勢千人以上が行列に参加。午前九時三十分同市松島町の西方寺（来迎寺境内）を出発し、同市松栄町に設けられた御砂場で砂を受け取り、氣比神宮に向かった。

同神宮で砂をまいた後、一雲上人らは、かつて西方寺のあった敦賀署前に戻り、ここから再びかごに乗って氣比神宮まで行列し、本殿で神事。その後、常宮神社に向かい、再び神事をした。

この日、沿道には多くの市民が見物に駆け付け、十一
ぶりの神事の様子をカメラに収めていた。

福井新聞では常宮神社の神事について、〃午後には船で
常宮神社も訪ねた。〃とあるけれども、川上季石先生の著
書では当日の行事進行について、

〇午後は海路常宮へ渡る予定であったが、嵐で海が時化の
ため、バスで陸路をとる。常宮神社に至り境内で沖に向つ
て海上賦算の儀式のあと、神社参拝、御化益を終え、バ
スにて帰路、敦賀湾の西の方から、山にかけて低く太い
虹がかかる。バスの走行と共に、虹の位置が変わり、やが
て天筒や気比の森にかかるのが望見されて、嵐の中の砂
持神事の最後を飾るかのように、美しい景観を呈した。

虹の下に当る金ヶ崎天満神社、金前寺に参詣して全日
程を終えた頃は、午後五時を過ぎており、一文字も羽織袴
も、白足袋も草鞋も、びっしり雨を吸い、肌も濡れていた。
とある。私はこの時には敦賀を離れていたので判らないが、
船での渡御は中止になったようである。福井新聞は予定記
事ということになる、それにしても虹のかかる敦賀湾は美
しく映えたことであろう。帰路、車窓から琵琶湖畔で望見
した虹が、敦賀湾の虹と重複するのである。

注(1) 川上季石著『芭蕉越前を歩く―季石手帖より―』に詳

細である。

(2)『敦賀の歴史』七十五ページ、『福井県の歴史散歩』百九十
四ページには寛政五年建立とあり、川上季石氏の著書には宝
暦十一年とある。宝暦十一年とあるが正しいか。

(3) 来迎寺は、敦賀市松島三丁目(江戸時代は来迎寺村と
称す。)にある。時宗の寺で山号は岡見山。

(4) 当日一般に配布されたパンフには、次のようなことが
記されていた。

『時宗とおどり念仏』

時宗は、体と言葉と心の三業(さんごう)を清らかにし、永
遠の生命と時間とを象徴する阿弥陀仏と一体になる念仏を説く。
限らない時間、空間、無量寿、無量光の阿弥陀と一体にな
ることは喜びであり、宗祖上人が二祖上人に「南無阿弥陀仏
はうれしきか」と尋ね、二祖上人が落涙するゆえんであった。
この喜びを形にあらわしたのが、おどり念仏であり、弘安
二年(一二七九)宗祖上人が信濃国佐久でおどり始め、しだ
いに定型を整え、以来時宗独特の行儀となるに至っている。

この他、当時の原形をなお少しく残し、今日、長野県無形
文化財として如上の佐久の地に伝わる在家女衆によるおどり
念仏があり、この度奉納のものはこの流れをくむものである。

なお、この「おどり念仏」より派生して、その宗教色を薄
め、娯楽的要素を強くした「念仏おどり」は、六斎念仏、壬生
狂言、かんこ踊り、棒踊り、剣舞などの民俗芸能、当地方の
追分、やつしき踊りをはじめとする盆踊りなど、日本の多く
の芸能の源流をなし、ひいては歌舞伎、能楽にも連なっている。